

令和6年度 両生・爬虫・哺乳類調査報告書

両生・爬虫・哺乳類担当 松尾 公則

1. 相川湿地の整備や野外観察会

例年通り湿地の整備、産卵数の確認、野外実習を実施しました。

1ー(1) 相川湿地整備

今年度は、4つの団体をお願いして**湿地整備**を行いました。

実施日：12月14日（土） 9:00～15:00

参加者：総勢23名・・・松尾（担当者1名）

長崎大学教育学部3年生理科専攻（大庭准教授以下5名）

時津幼稚園先生方（別所園長先生以下5名）

NPO法人環境保全教育研究所（10名）

九州電力長崎支社（2名）

長崎市役所（1名）

※ 相川自治会（10名）・・・自治会の方は、12月初めに湿地期の草刈りを実施している。

① 作業中のようす（12月14日）：9:00～15:00



湿地全体の作業風景



時津幼稚園の先生によるハート池の作成

② 作業後の湿地のようす（川から水を引き込んだ）



③ 作業後全員で記念撮影と作業後の湿地全体の写真



1ー(2) 産卵されたニホンアカガエル

溝掘り作業後の人工の小さな池には、例年通りにニホンアカガエルが産卵しました。毎年、12月には産卵が開始されます。今年は31日に卵塊1を確認しました。その後、寒波が襲ってきたため、次の産卵は1月7日の夜の50卵塊でした。それ以降の産卵はほとんどなく、1月中の産卵数は、結局約50卵塊でした。あまり雨が降らず寒かったためと思われます。2月になると、産卵の全盛期になります。2月3日には272卵塊、13日には372卵塊となりました。その後も、少しずつ産卵がおこなわれ、最終的には約500卵塊となりました。昨年の総卵塊数は約700個だったので、約200卵塊ほど少ない結果でした。理由はよく分かりませんが、来年はまた700卵塊にもどることを期待しています。

第一回目の観察会が2月11日でした。例年だと、この時期には産卵の最盛期は終わっているのですが、今年は遅れたため、生みたての卵塊に触れ合っていただくことができました。

今年も、昨年に引き続き、オタマジャクシを幼体まで育てるということを実施しています。今年は、4卵塊の約3000個体の飼育です。

10年ほど前の総卵塊数は約1000個でした。これに比べるとかなり少ないので、今後もいろいろな取り組みを行い、ニホンアカガエルの聖地を維持していきたいと思っています。

今年度最初に産卵された卵塊（12月31日）と産みたての卵塊（1月8日撮影）



今年度最初の卵塊（5番田でした）



1月8日の産みたての卵塊

1－（3）野外実習

今年度は下記の4団体で野外実習を実施しました。

- ① 2月11日（火） **NPO法人環境保全教育研究所主催** 関係者6名、参加者21名
家族ずれを中心とした観察会でした。ニホンアカガエルやカスミサンショウウオの卵塊と触れ合い、楽しく学んでいました。



湿地の説明をしているようす



ニホンアカガエルの卵塊との触れ合い

- ② 2月13日（木） **長崎大学教育学部3年生中理生物専攻学生（学生6名と大庭先生）**
2月8日に実施予定でしたが、大雪のため2月13日に変更しました。時津幼稚園の実習と重なりましたが、学生たちは、幼稚園児の様子を見て学ぶことが多かったようです。
中学校や高校の理科の教員を目指している学生たちです。ほとんどがカエルやサンショウウオの卵塊を初めて見たということで、その卵塊の感触も楽しんでいました。

- ③ 2月13日（木） **時津幼稚園年長組** 引率者：6名 園児39名
2月7日に実施予定でしたが、大雪のため日程の変更を行いました。実施に際しては相川自治会8名にも協力を依頼し、湿地内で事故が起こらないようにしました。
10:30からの約1時間、園児たちは喜んで卵塊に触れ、湿地の中を元気に走り回っていました。大きな歓声や喜んでいる姿を見ることができました。一年間、自治会の人とともに保全をしてよかったと思える瞬間でした。



湿地内で楽しく遊んでいるようす



ニホンアカガエルの卵塊に触れる

④ 2月23日(日) 九州両生爬虫類研究会長崎大会参加者 14:00~15:00

九州両生爬虫類研究会長崎大会が22日・23日の両日にわたって長崎総合科学大学付属高校で開催されました。大会終了後のエクスカージョンとして、相川湿地を案内し、湿地保全の状況を九州各地の研究者に紹介しました。参加者は20名でした。長崎市、地元自治会、研究者の三者による協力関係の説明では、湿地保全の理想的なモデルケースとの評価を受けることができました。何より、ニホンアカガエルの数百の卵塊には、参加者全員がびっくりしていました。



カスミサンショウウオの産卵地にて



相川湿地の説明をしているようす

1-(4). ニホンアカガエル人工増殖の取り組み

相川湿地でのニホンアカガエルの産卵数は年々減少しています。減少の理由は、幼生が育っていないことが大きいと思われます。特に、卵塊からふ化した直後の死亡率が高くなっているようです。そのため、4年前からニホンアカガエルの幼生飼育を行っています。人工的な容器で幼生を育て、飼育後に成長した幼生または幼体を湿地に放すという取り組みです。令和3年は松尾一人で、令和4年は松尾と時津幼稚園で、令和5・6年は、松尾と時津幼稚園と相川自治会の方でも幼生の飼育を取り組みました。令和7年の今年も同様に飼育を試みしています。3月末現在、約3000頭の幼生を飼育しているところです。5月の変態時に相川湿地に放流予定です。このような取り組みにより産卵数は増加しています。産卵数は、令和5年は300卵塊、令和6年は700卵塊、令和7年は500卵塊でした。

2. 相川湿地以外の調査結果

毎月一カ所の地点を決め、歩きまわりながら目撃できる両生類・爬虫類・哺乳類を調査しています。

2-(1) 県民の森 宮崎町川原大池周辺(4月)

4月9日：県民の森(環境省メッシュ4929-2588)

キャンプ場付近の道路脇の水路をせき止めた人口の池(図1)

両生類：カスミサンショウウオ(図2)、アカハライモリ、タゴガエル、
シュレーゲルアオガエル

爬虫類：ヤマカガシ



図 1. 人口の池



図 2. カスミサンショウウオの卵塊

4 月 14 日：川原大池周辺（4 8 2 9－7 6 4 6）

爬虫類：クサガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホントカゲ

2－(2) 長崎市相川湿地（5 月）

今年も 2 月から飼育（図 1）していたニホンアカガエルの幼体を湿地に放流（図 2・3）しました。

放流総数は、約 2000 匹です。



図 1. 自宅での飼育



図 2. 放流中



図 3. 放流した幼体

2－(3) 長崎市神浦川上流（6 月）

6 月 30 日：神浦川下流・上流（環境省メッシュ 4 9 2 9－2 5 4 5・2 5 4 8）

琉球大学教授富永篤さん（図 1）と一緒にカジカガエル調査を実施した。

両生類：カジカガエル（幼生）（図 2）タゴガエル（成体）（図 3）



図 1. 計測中の富永教授



図 2. 採集したカジカガエルの幼生



図 3. タゴガエル

2-(4) 長崎市香焼町（7月）

7月22日：香焼町馬手ケ浦（環境省メッシュ4929-0635（図1）・0624）
道路を歩きながら目視による調査を実施しました。

爬虫類：ニホンヤモリ（成体1）（図2）、ニホントカゲ（成体1・卵塊10）



図1. 馬手ケ浦から大島造船ドック方面

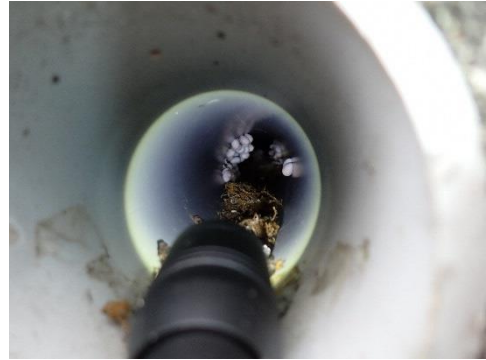


図2. ニホンヤモリの卵塊

2-(5) 長崎市宮摺町・大崎町・千々町（8月）

8月27日：宮摺町（環境省メッシュ4929-0712）

大崎町（環境省メッシュ4829-7791）

千々町（環境省メッシュ4829-7780）

海岸線にある3つの集落周辺を調査しました。

爬虫類：ニホンヤモリ（卵塊）

哺乳類：テン（糞）

2-(6) 長崎市川原町・宮崎町（9月）

9月30日：宮崎ダム周辺（環境省メッシュ4829-7645）

川原町・宮崎町の畑地（環境省メッシュ4829-5656・66）

ダム周辺と畑地の中を調査しました。

爬虫類：ニホントカゲ（成体2）、ニホンヤモリ（卵塊）

哺乳類：イノシシ（あせり跡）、イタチ属の一種（糞）

2-(7) 長崎市三川町から木場町の山中（10月）

10月20日：西山台（環境省メッシュ4929-1732）

帆場岳入り口付近（環境省メッシュ4929-1733）

普賢神社付近（環境省メッシュ4929-1733）

道路周辺の山道や広場を調査しました。

爬虫類：ニホントカゲ（幼体）

哺乳類：イノシシ（あせり跡）、イタチ属の一種（糞）

2-(8) 長崎市本河内（11月）

11月23日：本河内・鳴滝（環境省メッシュ4929-1702）

国指定天然記念物キレツチトリモチ自生地北限調査（図1）に同行した。キレツチト

リモチ調査が主であったが、同時に、両爬哺の調査も行った。今回の調査では林内が極端に乾燥化しており、キイレツチトリモチ（図 2）の確認はできませんでした。

哺乳類：イノシシ（あせり跡）、ノウサギ（糞）（図 3）



図 1. 調査風景



図 2. キイレツチトリモチ（2016 年調査時）



図 3. ノウサギの糞

2－(9) 長崎市相川湿地の整備作業（12 月）

12 月 14 日：相川湿地の整備作業を行いました。詳細は 1－（1）の相川湿地の整備作業に書いています。

2－(10) 長崎市相川湿地ニホンアカガエルの卵塊調査（1 月）

12 月から 2 月にかけてニホンアカガエルの卵塊数を調査した。詳しいことは 1－（2）の相川湿地の卵塊調査に書いています。

あわせて、下記の三カ所でも調査を実施したので付け加えておきます。

令和 7 年 1 月 14 日：長崎市田手原町（環境省メッシュ 4 9 2 9－0 7 8 2）

カスミサンショウウオ（卵塊）（図 1）

令和 7 年 1 月 15 日：長崎市野母恐竜博物館の池（環境省メッシュ 4 9 2 9－7 6 0 1）

ニホンアカガエル（卵塊約 25）（図 2）ニホンヒキガエルに産卵は見られなかった

令和 7 年 1 月 18 日：長崎市黒崎池島（環境省メッシュ 4 9 2 9－2 4 5 7）

ニシヤモリ（成体 5（図 3）、卵塊多数）ニホンアマガエル（冬眠中の成体）（図 4）



図 1. カスミサンショウウオと卵塊



図 2. ニホンアカガエルの卵塊



図 3. ニシヤモリ



図 4. 冬眠中だったニホンアマガエル

2－(11) 長崎市相川湿地での野外観察会（2月）

2月の月上旬に4団体の野外観察会を実施しました。詳しいことは1－（3）に書いています。

2－(12) 長崎市内を調査（3月）

ニホンアカガエルの幼生飼育に取り組んでいます。

併せて、2地点の調査を実施しました。

令和7年3月3日：長崎市田手原（環境省メッシュ4929－0782）

両生類：ニホンアカガエル

令和7年3月8日：長崎市野母恐竜博物館の池（環境省メッシュ4929－7601）

両生類：ニホンアカガエル、ニホンヒキガエル

3. まとめ

長崎市の自然をずっと見つめてきました。ずっと言われていることですが長崎市街地周辺では、多くの水田が放棄され荒れ地になり、耕作継続中の水田でも圃場整備が進み乾田化が進んでいます。長崎半島では水田はほとんど残っていないし、旧琴海町や外海町も放棄された水田が増え続けています。特に、両生類の産卵場として重要な谷間や山際の放棄が極端です。調査で回るたびに、以前両生類が多く見られた場所が藪化しているのにショックを受けています。両生類は、産卵や幼生の成長に持続的な水場が必要です。農家の高齢化による水田放棄は、今後さらに進行していくと思われます。

そんな中、嬉しいこともありました。野母町にある恐竜博物館敷地内のビオトープでの池や水路で多くのニホンアカガエルの卵塊が見られたことです。ニホンヒキガエルの産卵も継続中です。野母半島には小さいけれど多くの水場があり、多くのニホンアカガエルが生息していました。しかし、2010年ごろにはほとんど見られなくなり、絶滅したものと思っていました。2020年ごろ、放置された人工的なプラ船の水を利用して細々と生き残っていることが確認され、他にも数か所で幼生が見つかりました。ニホンアカガエルの命はつながっていたのです。その後、恐竜博物館敷地内のビオトープの整備が進み、カエルにとっていい場所が作られました。今年もたくさんの卵塊が確認され、春にはニホンアカガエルとニホンヒキガエルの多くのオタマジャクシが泳ぎ回る姿を見ることができると思います。今後とも、ビオトープが維持される限り、オタマジャクシの姿は見ることもできるので、来場者にも教育の場として活用してもらいたいと思っています。

相川湿地での保全活動も継続中です。今年度も、1年間を通して湿地の保全に取り組むことができました。整備、卵塊数調査、野外観察会は例年通りに実施できました。湿地整備を本格的に始めたのは2014年からなので、11回連続して実施したことになります。その間、多くのボランティアの方の協力でニホンアカガエルが産卵できる湿地の状態を維持できました。ただ、我々の仕事は一日だけのことです。長崎市と地元の相川自治会の日々の活動が何とか湿地の状態を維持できている原動力であることは間違いないので、今後も湿地維持のために協力して動いて行きたいと思います。長崎市内に残っているわずかな湿地、官民協力して守ることができたらと思います。

両生類だけについてまとめてきましたが、同時に、これらを大事なエサとして利用している爬虫類や哺乳類でも同じことです。特に、ヘビ類については、目にする機会が減っています。めったに会えないイタチやテン・キツネ・タヌキも減少傾向がうかがえます。それに対し、イノシシやシカは増え続け農林業に対する被害は増加しています。また、特定外来種であるアライグマが市内に侵入してきたことが分かっており、今後は、その増加により、農業被害も出てくるものと思われます。

普段の日常生活では野生動物に出会えることはほとんどありません。オタマジャクシやヘビをここ数年見たことがない人も多いと思います。それでも、注意して自然を見ていると意外にいるものです。自然好きな人が増えたらいいなと思います。

この長崎市が、人間だけでなく野生の動物にもすみやすい場所があることを願っています。